

都道府県番号	学校名 奈良県立畝傍高等学校	R4～R7
--------	----------------	-------

令和7年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

本研究では、各教科の学びを基盤としながら探究的な力を育成する教育課程の研究開発を行う。これにより、実社会における課題の発見・解決や、新たな社会的価値の創造に資する資質・能力を育成することを目的とする。

2 研究の概要

本校では、令和元年度から3年間、文部科学省指定の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」に取り組み、課題発見・解決型の学びにおいて、一定の成果を上げてきた。本研究では、この取組をさらに発展・充実させ、各教科の学びを基盤としながら、様々な情報を活用・統合し、実社会における課題の発見・解決や社会的価値の創造に資する資質・能力を育成することを目的として、教科「グローバル探究」を新設し、その教育課程の研究開発を行う。

- 1 必履修科目「情報Ⅰ」（標準2単位）の代替として、科目「探究基礎」（3単位）を新設し、情報活用能力を基盤とした探究的な力を育成する教育課程を開発する。
- 2 生徒自身の興味・関心に基づいた個別の課題設定を支援する。教科の枠を越えた多角的・複合的な視点で課題を検討し探究する力を養うとともに、教科横断的で、実生活と関連した学びの在り方を研究し、その教育効果を検証する。
- 3 行政・高等教育機関、NPOを含む地域組織等とコンソーシアムを組織し、外部機関と協力しながら地域の実態に即した探究学習を展開する。
- 4 学習成果を対外的に発信する機会を設け、実社会で活用する力を育成する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

（i）研究開始時点の現状分析と研究の目的

- ① 研究開始時までの事業において、学校設定科目「グローバル国語」「グローバル英語」「課題研究」等の実施により、課題発見・解決型の学習については一定の成果を上げてきた。一方で、課題研究を自らのキャリア形成や社会的な価値の創造に結びつける意識の醸成には課題が残っていた。そこで、令和4年度入学生より、第2学年に「課題研究」又は「理数探究」の選択科目を配置し、より体系的な探究学習の構築を図る教育課程とした。
- ② 本研究では、これまでの課題を踏まえ、令和5年度から、新教科「グローバル探究」を新設し、第1学年での新科目「探究基礎」を第2学年の「課題研究」や「理数探究」につなげ、生徒自身の興味・関心に基づいた探究活動を行うこととした。次に、各教科での学びを基盤としながら、様々な情報を活用・統合し、実社会における課題発見・解決や社会的価値の創造に資する資質・能力を育成することとした。「探究基礎」から第2学年の「課題研究・理数探究」への接続を強化し、各教科の学習と探究活動を横断的・体系的に統合することを研究の目的とした。

（ii）研究仮説

- ① 新教科「グローバル探究」を軸とした教科横断的カリキュラムの編成
新教科「グローバル探究」には、第1学年において、必履修科目「情報Ⅰ」の内容を包含した新科目「探究基礎」を設置し、教科横断的かつ協働的な学びを行う。この第1学年での学びを第2学年の「研究」および「理数探究」へ質的に繋げることで、各教科での学習を有機的に結び付け、高度な「課題発見

- ・「解決型学習」を実現する。

第1学年においては、以下の指導上の工夫を講じる。

- ・生徒個々の興味・関心に基づいた自主的な探究活動を促し、各々の課題設定に適した学習を実施する。
- ・ディスカッションやディベートを積極的に導入し、協働的な学習を展開する。
- ・大学や研究機関等の助言を得ながら、レポート作成やプレゼンテーションを通じた論理的分析・表現技法を習得させる。
- ・ICTツールを活用し、データの収集・分析に基づいた科学的な問題発見・解決手法を実践する。
- ・探究の成果を対外的に発信・公表する機会を設け、社会的な還元を意識した学習を行う。

② 教科横断的な学びによる資質・能力の変容と深化

第1学年から、生徒自らが課題を設定し、教科の枠組みを越えた課題発見・解決型学習に取り組むことで、自ら課題を解決しようとする態度や考え方を育む。これにより、第2学年の「課題研究」・「理数探究」において、より内発的動機付けに基づいた専門性の高い探究活動が実現できると考える。具体的には、本取組を通じて以下の資質・能力を育成することを期待する。

「課題発見・解決能力」「科学的・論理的思考力」「創造力、表現力、コミュニケーション能力」「情報活用能力」「言語能力」

(2) 教育課程の特例

① 新教科「グローバル探究」の設定

新教科「グローバル探究」を設定し、第1学年に新科目「探究基礎」（3単位）、第2学年に「課題研究」（3単位）を配置する。これらの2科目を体系的に編成することにより、生徒が段階的かつ継続的に探究活動に取り組み、学年進行に応じて探究の質を高めていくことを可能にする。

② 新教科「グローバル探究」の目的

- ・生徒一人ひとりの興味・関心に基づいた課題設定と探究活動を通して、課題発見・解決能力、探究心、自主性、企画力を育成するとともに、主体性、論理的思考力や表現力を養う。
- ・大学や関係機関、企業や地域と連携した学習や、ディスカッション、ディベート等を取り入れた協働的な学習を行うことにより、創造力、表現力、コミュニケーション能力の向上を図る。
- ・情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、情報技術を効果的に活用して課題の発見・解決を行うことにより、創造力、表現力、情報活用能力を育成する。
- ・海外研修や国際交流の取組を一層充実させるために、英語での発表や討論を取り入れ、論理的思考力や、表現力、コミュニケーション能力の育成を図る。

③ 新教科「グローバル探究」の内容

- ・実社会における課題発見・解決につなげる視点から、生徒が自らテーマを設定し、学習を進める。
- ・探究活動のプロセスを重視し、課題設定から調査・分析、考察に至るまでの過程で生じた疑問や思考の変容を記録させることで、生徒自身が自己の成長過程を客観的に認識できるようにする。
- ・情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、問題の発見・解決の実践的な能力を養う。

④ 「探究基礎」は「情報Ⅰ」の代替科目とし、「課題研究」または「理数探究」は、「総合的な探究の時間」の代替科目とする。

(3) 研究成果の評価方法

- ① 第1学年、第2学年の生徒を対象として、年間2回（7月、12月）の授業アンケートと、年間2回（10月、2月）の意識調査を実施し、授業内容や生徒の学習意欲等に関する結果から、その成果について検証する。
- ② 学習の成果を対外的に発信する機会として、2月に探究成果発表会を行い、発表会における助言者の評価や参加者のアンケート結果を分析し、探究活動の成果及び課題を明らかにする。
- ③ 校内外で実施される、様々な研修会や発表会等への生徒参加状況を把握・分析し、探究活動が生徒の主体的な学習活動にどのような影響を及ぼしているかについて検証する。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

本校では、第2学年において、生徒自身の興味・関心に基づき、個々に課題を設定して探究活動を行う「課題研究」（2単位）を実施してきた。生徒の取組や教員の指導の在り方については、一定の成果を上げてきたものの、生徒が研究を自身のキャリアにつながる内容にまで深化させるには至っていないという課題があった。そこで、新教科「グローバル探究」を設定し、第1学年に新科目「探究基礎」（3単位）、第2学年に「課題研究」または「理数探究」（3単位）を配置して、体系的な探究学習の構築を図り、その教育効果を検証する。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第一年次	<p>平成26年度からスーパーグローバルハイスクールとして、また令和元年度からは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」において、生徒の探究的な学びを実現するため、以下の科目を設定して取組を継続してきた。</p> <ul style="list-style-type: none">・第1学年「グローバル英語」（全生徒必履修1単位）〔学校設定科目〕・第1学年「グローバル国語」（全生徒必履修1単位）〔学校設定科目〕・第2学年「課題研究」（全生徒必履修2単位）〔「総合的な探究の時間」3単位のうち2単位〕・第3学年「未来への航海図」（全生徒必履修1単位）〔「総合的な探究の時間」3単位のうち1単位〕 <p>学校設定科目として取り組んできた「グローバル英語」では、既習内容を実践的な発話活動やディスカッション、ライティング活動を通して定着させ、発展的な活動につなげることで、英語を運用する力を養うこと、ALTと英語で積極的にコミュニケーションをとり、自分の意見を英語で伝えられるようにすることを目標としている。授業では、1クラスを2分割し、それぞれでALTと日本人教員によるチーム・ティーチングを行っている。</p> <p>また、「グローバル国語」では、種類の異なる情報を適切な言葉を用いて他者に伝えるよう要約することや、話し合いやディベート、プレゼンテーションを通して相手の意図をくみ取り、物の見方を広げることに取り組んできた。令和4年度の新教育課程の実施に伴い、これらの実践内容を「現代の国語」と「言語文化」に位置付けて取り組むこととした。</p>
第二年次	<p>新教科「グローバル探究」を令和5年度入学生から実施するため、教務部、教育企画部を中心に、各教科主任を含めたプロジェクトチームを立ち上げて研究を開始した。プロジェクトチームでは、すべての教科で生徒が探究的な学びの時間を持つことを確認した上で、新科目「探究基礎」の方向性について検討を行った。検討の結果、以下のように進めることとした。</p> <ul style="list-style-type: none">・令和5年度から実施する新科目「探究基礎」（3単位）は、必履修科目「情報Ⅰ」（標準2単位）と学校設定科目「グローバル英語」（1単位）を融合した科目とする。・「情報Ⅰ」については、「探究基礎」の中で代替できるように、「情報Ⅰ」の学習内容を、他教科との連携を図りながら精選する。・「探究基礎」の学習内容には、「物事の観察方法」「問いを立てる方法」「問題解決の過程」に加え、第2学年「課題研究」の初期に学習していた「情報収集の方法」「情報の妥当性」「問いのブラッシュアップ方法」等を含める。・「探究基礎」は教科横断的学習であることから、できるだけ多くの教員が「探究基礎」に関わるような指導体制を構築する。 <p>「探究基礎」の指導体制構築については教育企画部が、シラバス作成については教務部、教育企画部、情報科教員、外国語科教員が中心になって行った。</p> <p>また、第2学年で実施している「課題研究」については、理数系分野の探究を充実させるため、令和4年度入学生から、「課題研究」と「理数探究」を選択できる教育課程とした。</p>

<p>第三年次</p>	<p>教科「グローバル探究」の設置から2年目を迎え、1年生における「探究基礎」（3単位）及び2年生の「課題研究」・「理数探究」（3単位）のそれぞれの目標の実現を意識しながら、前年度の課題を踏まえて、主に「探究基礎」の単元計画を一新した。前年度は探究に必要な資質能力を要素ごとに分解し、それらを積み上げていくことで、生徒に必要な力を育成する授業設計をしていた。この年度は、最初に「目指す姿（ゴール）」を示し、そこに到達するために必要な力として、情報収集や分析、視点の拡大や課題解決に向けた合意形成などの能力を体感させながら学ばせる構成へと変更した。具体的には、1年生を2年生の中間発表に「聞き手」として参加させることとした。これが1年生にとっては次年度の探究活動を具体的にイメージできる機会となり、2年生と共に有識者の助言を聞くことで、「課題」への迫り方や探究活動をしていく上での心構えについて学ぶことができた。2年生にとっても、自分たちの取組を再整理し、1年生からの質問を受けることで、新たな視点を獲得したり、言葉の定義を再度整理したりするなど、多くの気づきを得ることができた。さらに外部講師を招聘し、講演会を複数回実施した。分野を問わず、国内外で活躍されている方たちの「本物」に触れることにより、実際に留学することを決断するに至った生徒が現れるなど、生徒たちの行動に変容が見られた。</p> <p>9月には文部科学省とのWeb評価会議が行われ、主にループリックの改訂とシラバスの整理についてご指導・ご助言を賜った。現在運用しているループリックでは、生徒の探究を支援・評価する際に、特定の時期や場面に限定した評価に陥る可能性があること、また、学習指導要領で謳われている3観点にとどまらず、「探究の資質」を見とれるような観点を含むループリックの必要性についてご指摘をいただいている。これを受け、校内ではループリック改訂と並行して、「グローバル探究」の目標を具体的にシラバスに反映させていくことで、1年次における「探究基礎」から2年次での「課題研究」・「理数探究」への流れの再整理を進めている。原案を基に運営指導委員会で複数回協議をし、方向性の整理を始めた。また、その内容については、職員会議等で共有するとともに、探究に関わる職員研修を実施し、全教員が生徒の資質・能力向上について具体的なイメージを共有できる機会をもつようにしている。最終年度に向けては、生徒の意識調査の結果や教員からの定期的なフィードバックの内容により、実施内容の検証と具体的な目標設定の見直しを行った。</p>
<p>第四年次</p>	<p>〈概要図策定〉</p> <p>申請時には、育成を目指す力を「課題発見・解決能力」「科学的・論理的思考力」「創造力・表現力・コミュニケーション能力」「情報活用能力」「言語能力」の5つとしていた。しかし、研究を進める中で、「課題発見・解決力」「科学的・論理的思考力」「対話力」「情報活用能力」の4つへと整理した。教科「グローバル探究」において、1年生から2年生を通じて本校が生徒に身に付けさせたい力を概要図として可視化し、まずは探究に伴走する教員間の「目線合わせ」をはかった。第1回の運営指導委員会の際には、「課題発見力」としていたが、校内での検討を重ね、当初の目標である「課題発見力・解決力」とすることとした。</p> <p>当初は、生徒自らが解決したい、迫りたいと考える「課題」を自らを見つけることを重視し、「解決」に至る過程を必ずしも求めてこなかった。これは「課題」が何であるかを追究する姿勢こそを生徒に求めており、「課題」を明らかにすることは同時に解決への糸口を見付けることであると考えていたためである。しかし、生徒が試行錯誤を重ね、実験や検証などを通して現象を理解していく過程そのものが、「解決」に向けた取組であると捉え直し、再整理を行った。</p> <p>概要図には、「探究基礎」及び「課題研究・理数探究」のループリックと、実際の取組内容を時系列で示している。縦軸に沿って整理することで、生徒の「探究の資質」を見取ることが可能となり、現行ループリックの改訂にも活用できると考えている。力の伸長時期については、特定の時期だけで育成できるものではないことを前提としつつ、「特に重視する時期」を示すことで、校内における目標の共有を図る構成とした。</p> <p>〈シラバスの整理〉</p>

	<p>教科目標を次のように定め、第3回運営指導委員会において、確認をいただいた。</p> <p>(1) 問題が複雑化する現代において、課題意識をもち、他者との対話を通じて課題解決に向かうことのできる人材の基盤をつくる。</p> <p>(2) 4つの力（ア 課題発見・解決力、イ 科学的・論理的思考力、ウ 対話力、エ 情報活用能力）を主軸とし、価値創造や対話によるジレンマの克服、責任ある行動をとる力の基礎を育成する。</p> <p>(3) 生徒一人ひとりが、既存の枠組みにとらわれず、多角的な視点から問題の本質に迫ろうとする姿勢を育成する。</p> <p>(4) 生徒一人ひとりが、異なる分野を掛け合わせ、社会の複雑な問題に対して独自の解を見いだそうとする姿勢を育成する。</p> <p>(5) 生徒一人ひとりが、なぜ学び、なぜ取り組むのかを言葉にし、用意された答えがない「問い」に向き合い、最適解に辿りついた後も、より本質的で深い問いを立てることができる力を育成する。</p> <p>また、指導の留意点について、研究2年次に提出したシラバスに追記を行った。これは、生徒の探究に伴走する中で、不断の見直しを通して指導者が留意すべき点として見出したものである。</p> <p>(1) 生徒の探究に伴走する際、単なる並走ではなく、適切に「介入」することで、生徒がより本質的な問いをたてることを支援する。</p> <p>(2) 生徒の「問い」が生まれるプロセスを理解し、全教科においても、「答え」を求めるにとどまらず、違和感や疑問が生まれるような授業を横断的に実施する。また、同様の環境や機会を提供する。</p> <p>特に(2)については、新教科「グローバル探究」に限らず、あらゆる教育活動の場面において意識されるべき教員の資質であると考ええる。</p>
--	---

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	<p><「特別の教育課程」の編成・実施に向けた準備></p> <p>① 「情報Ⅰ」（必修2単位）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観点別評価結果による評価 ・授業内容・形態の評価 ・生徒レポートによる指導内容の評価 <p>② 「グローバル英語」（平成26年度より学校設定科目、全生徒履修1単位）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CAN-DO LIST 等による英語4技能における達成度 ・外部検定等による客観的な評価 <p>③ LHRや放課後等の活用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が疑問に感じたことなどを記録した「気づきノート」の精査 ・次年度の教科等横断的な取組に向け、指導体制を整備し、内容の評価 <p>④ 探究的、教科等横断的な学びの評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「課題研究」生徒授業アンケートの検証 ・研究発表会アンケートの検証
第二年次	<p><「特別の教育課程」の実施（1年目）></p> <p>① 「グローバル探究」、新教育課程の編成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観点別評価結果による評価 ・生徒の授業アンケートによる評価 ・ループリックの検討 <p>② 教科等横断的な学びの研究について</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表や相互意見交換を通して「課題研究」・「理数探究」を相互評価 ・授業内容はルーブリックに基づき評価 ・教材開発については、生徒アンケートや教員によるフィードバックから評価 ・外部機関との連携においては、外部機関による意見、生徒の感想により評価 ・探究成果発表会については、指導助言者等の意見を基に評価 ・研修旅行については、生徒の意見や感想を基に評価 ・各教科間の連携については観点別評価結果や生徒の授業評価から評価 ・A L T の活用については、活用した授業時間数や授業以外での英語指導の様子からの評価
第三年次	<p><「特別の教育課程」の実施（2年目）></p> <p>① 「グローバル探究」、新教育課程の編成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の授業アンケートによる評価（7月、12月） ・生徒対象の意識調査による評価（12月、2月） <p>② 教科等横断的な学びの研究について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材開発については、生徒アンケートや教員によるフィードバックから評価 ・外部機関との連携においては、外部機関による意見、生徒の感想により評価 ・各教科間の連携については校内における教育課程検討委員会等において評価
第四年次	<p><「特別の教育課程」の実施（3年目）></p> <p>① 「グローバル探究」、新教育課程の編成について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の授業アンケートによる評価（7月、12月） ・生徒対象の意識調査による評価（12月、2月） <p>② 教科等横断的な学びの研究について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教材開発については、生徒アンケートや教員によるフィードバックから評価 ・外部機関との連携においては、外部機関による意見、生徒の感想により評価 ・各教科間の連携については校内における教育課程検討委員会等において評価

5 研究開発の成果

（1）実施による効果

① 次年度以降の教育課程について

本校では、令和元年度から「地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)」に取り組んできた。令和4年度から「文部科学省研究開発学校」の指定校として、生徒の探究的な学びの実現を目指した学校設定科目を教育課程に編成してきた。これらの継続的な取組によって、生徒同士が学び合う雰囲気が校内に醸成され、学年間における対話的な関わりの増加や、学校行事において生徒が主体性を発揮する場面が増えるなど、探究的な力の育成に良い影響をもたらしている。

今年度で「文部科学省研究開発学校」の指定が終了するが、さらなる探究的な学びの充実を図るため、これまでの取組を継承する形で特別の教育課程を編成し、教育活動を実施したい。具体的には、令和4年度に本事業で設置した新教科「グローバル探究」を、指定終了後も引き続き教育課程に位置付ける。個々の興味・関心に応じた課題設定を重視するとともに、課題解決に向けた探究の過程で生じた疑問や思考などを自己の成長過程として認識できるようにし、探究心や主体性のさらなる育成を目指す。また、自ら設定したテーマの解決に向けて、情報技術を活用し、より実用的な情報活用能力の育成を図る。

実際の運用は以下の形である（令和7年12月時点）。

令和7年度まで	1年	探究基礎（情報、探究作法、英語） 3単位	全員履修
	2年	課題研究・理数探究（いずれかを選択） 3単位	3単位のうち1単位は夏期休業中等を利用したまとめ取り

令和8年度から	1年	グローバル探究Ⅰ（情報、英語） 1単位	全員履修
		グローバル探究Ⅱ（情報、探究作法） 2単位	全員履修
	2年	グローバル探究Ⅲ（課題研究・理数探究）（いずれかを選択）3単位	3単位のうち1単位は夏期休業中等を利用したまとめ取り

② 現在の時間割上の工夫等

学校設定教科「グローバル探究」のうち、1年生の「探究基礎」では、情報、探究作法、英語の3分野で単元計画を策定している。「通常週」と「探究週」という区分を設け、通常週では情報分野を2時間、英語分野を1時間実施している。研究2年次における探究週では、教務部と連携して時間割を変更し、探究作法を指導する教員と、情報及び英語の教科担当がTeam Teaching（以降T.T.）を実施した。研究3年次からは、探究作法におけるT.T.は情報科とのみとし、英語分野は内容の関連性を持たせつつ、分野の特性を踏まえ独立して実施することとした。その結果、時間割運用が校内に定着し、当初「情報」と呼ばれていた時間が、今では「探究情報」と認識されるようになるなど、各分野の役割が明確になり、授業内容の精選にもつながっている。

最終年度における大きな変更点は、「探究基礎」のうち探究作法を担う教員を、第1学年の担任に委ねたことである。これまでは、新設科目への理解を校内に浸透させるため、教科や学年に偏りなく担当者を配置してきたが、探究作法の指導内容をホームルーム運営や進路指導等と関連付けて実施することで、より高い教育効果が期待できると判断したためである。

第1学年の教員対象に実施したアンケート（令和7年10月実施）からは、担任が探究作法を担当することについて肯定的な意見が多く、生徒の新たな側面を把握できた、進路指導や教科指導にも役立てることができているといった声が寄せられた。

副次的な効果として、第2学年のLHRの時間に、学年主体で中間発表会を「クラス内」で実施した点があげられる。これは、全体の中間発表会に先立って、担任主導で実施したものであり、その運営方法が、2週間後に行われた全体の中間発表会の運営に大きく役立った。「対話」を充実させるための工夫や、生徒リーダーが主体的に進行する場面が具体化し、教員の意識変化が、生徒の探究環境の充実につながったと言える。同時期に実施した研修旅行においても、生徒が主体となって研修計画をたて、企業訪問等を実施するなど、学校行事においても学びの成果が現れ始めている。

また、これまで課題となっていた2年生の「課題研究」「理数探究」の時間割については、今年度から2コマ連続の授業とし、休み時間を設けず講座単位で実施する形に変更した。これにより、複数教員による生徒の支援体制づくりができ、生徒の探究内容の充実と、教員の支援の質の向上が図られている。次年度以降もこの形を継続する予定である。なお、学年を越えた学びの還流を目指し、昨年度は2年生が1年生を聞き手とする中間発表会を実施したが、今年度は2年生同士による中間発表会に焦点を絞った。理由の一つには、中間発表後のブラッシュアップ及び振り返りの時間が十分確保できず、探究の深まりがさほど見られなかったこと、また一部の1年生にとっては、2年生の発表内容を「到達点」と捉えてしまう可能性が指摘されたためである。今年度の中間発表会は2年生のみの開催としたが、本校の授業公開週間と重なったこともあり、多くの保護者に「聞き手」として参加いただき、本校の探究的な学びへの理解を深めていただく機会となった。

③ 生徒への影響

外部講師を招聘した講演会を、今年度も複数回継続して実施した。分野を問わず、国内外で活躍されている方々の「本物」の声に触れることにより、生徒の視野が広がり、昨年度に引き続き、実際に留学を決断する生徒が現れるなど、生徒の行動に変容が見られるようになった。校内では、今年夏までに長期・短期を問わず留学を経験した生徒たちによる「留学報告会」を実施した（令和7年10月）。生徒主体で企画さ

れたこの取組には、異文化に関心をもつ生徒や、留学に興味があるが一步を踏み出せずにいる生徒など、約 30 名が参加し、生徒同士が学び合う機会が創出された。また、ルワンダで女性支援活動を行っている講師の講演に感銘を受けた生徒が中心となり、「ルワンダと畝傍高校をつなぐプロジェクト」を立ち上げた。有志生徒は、現地のシングルマザーの置かれている状況を学び、自分たちにできる支援の在り方を検討した上で、現地女性の縫製技術を活かして、ブックカバーや巾着等の制作を依頼し、本校文化祭で販売した。製品のデザインやサンプルづくり、収支計画に至るまで、全て生徒自身が主体となってやり遂げ、その収益を寄付するという成果につなげた。すでに次年度に向けた計画も進められており、講演会をきっかけとして、生徒の探究心が具体的な行動と成果に結びついた好例である。

さらに、本校の海外交流の取組として、台湾からの高校生との交流会を、有志生徒が中心となり企画している。交流内容の検討やオリジナルかるたの制作などを通して、文化的背景の異なる同世代との交流に向け、学年の枠を越えた主体的な活動に熱心に取り組んでいる。

また、今年度は、現在大学 4 年生に在籍する卒業生が、第 2 学年対象に『探究テーマとの出会い』と題した講演を行った。現役大学生に学年全体を対象とした講演を依頼するのは、本校として初めての試みであったが、高校在学中の探究テーマを大学でも継続し、就職先においても、そのテーマの具体化を目指している姿は、現役生に大きな刺激を与えた。11 月に実施をした探究中間発表会にも、他の卒業生とともに聞き手として参加し、かねてより目指していた、年度を越えた「縦のつながり」が育ちつつあることを実感している。

昨年度から発行している『探究通信』は、卒業生の声や講演内容の振り返りなどを通じて、「探究」と「進路」を関連付けて考える機会の創出を目的とし、今後も続けて発行していく予定である。

④ 第 2 学年「課題研究」「理数探究」について（意識調査の結果から）

令和 7 年 12 月初旬に、2 年生対象の意識調査を実施した。例年、中間発表後に調査を実施しているもので、研究テーマの設定理由や活動状況に加え、挑戦意欲、成長実感、進路意識への影響等について回答を求めた。（回答数：326 名）

1. 研究テーマの設定理由

研究テーマ設定に際して最も意識した点については、「自分自身の興味関心」が 96.3%と圧倒的多数を占め、「自分の進路」3.4%、「その他」1%であった。「その他」には、社会の役に立つかどうかといった実用性や社会貢献を意識した記述が見られた。多くの生徒が、自分の興味関心を原点として研究テーマを設定できていると思われる。

2. 活動状況

達成度が高い項目としては、「面白いテーマに出会えた」「他の人の意見も尊重しながら、協力して取り組んでいる」「中間発表の意義を理解して取り組めた」が挙げられ、いずれも 8 割以上の生徒が肯定的に回答している。自ら設定した研究テーマに高い満足度を持ち、探究活動の意義を理解していることがうかがえる。一方で、研究活動の中核となるスキルの中には、一定の課題が見られるものもある。「現状の分析・目的の明確化」「意見の表明と根拠提示のスキル」「必要な情報の抽出」については、肯定的回答が 7 割を超えているが、約 4 分の 1 の生徒が困難や改善の余地を感じていることが分かった。特に「独自性の創出」や「研究ノートを活用」については達成度が低く、大きな課題と言える。「独自性の創出」についての回答からは、想定内の探究に留まっていることが想像され、本質的な「問い」が生まれるテーマ設定になっているかの検証が必要である。また研究ノートについては、56.4%が肯定的に捉えている一方、記録内容や活用方法に苦手意識を持っている生徒も多い。第 3 回運営指導委員会においては、卒業生の優れたノートを参考例として提示するなど、真似ることから改善を図る工夫が有効であるとの助言をいただいた。また、ワークシート中心の学習経験が影響している可能性についても指摘があった。

最大の課題は、探究活動の進捗管理である。「計画を立てて活動することができている」と肯定的に回答した生徒は 55.5%であり、計画立案自体に困難を抱えている生徒が多いことが明らかになった。教員が伴走しながら確認を行っているものの、進捗管理については指導上の課題ともなっている。

3. 挑戦意欲・成長実感・進路意識

「新しいことへの挑戦」について肯定的に回答した生徒は22.9%であり、多くの生徒が現在の研究活動に注力をしており、新たな挑戦への意識はまだ醸成されていない傾向が見られる。記述内容からは、研究テーマについて別の視点からのアプローチ、外部コンテストへの挑戦、新たな切り口での探究の深化、自身の学習方法の変更、部活動における弱点克服、語学検定の挑戦等、スキルアップに関連する行動が見られた。「進路選択への関心に変化があった」と回答した生徒は29.1%であった。研究テーマの設定時に進路を意識した生徒は少数であったが、1年間の探究活動を通じて、進路意識に変化があった生徒が一定数いることがわかる。夏期休業中の大学訪問や有識者へのインタビュー等を通じて、大学でも現在のテーマを学び続けたいと考える生徒の声も聞かれた。現在の3年生対象に調査した結果、昨年度の同時期の調査では、「進路選択への関心度に変化があった」と肯定的に回答した生徒が34.8%であったが、現在では、その数値は上昇し、37.7%の生徒が、探究活動による変容を実際の進路決定に活かしていることが分かった。

最後に、1年生の「探究基礎」から2年生の現在に至るまで、生徒が最も成長を実感した力としては、「情報を分析する力」が50.0%、「自分の言葉で表現をする力」39.3%、「課題を発見する力」31.6%、「論理的に考える力」24.2%などがあげられた。

総じて「興味・関心」を原動力としながら探究活動をすすめてきた生徒たちが、情報分析力の伸長において一定の達成感を感じているが、本校が探究の柱として重視している「課題発見」については、改善の余地があることがうかがえる。

⑤ 教員への影響

「探究」に関わる講演会や大学見学会を伴うフィールドワークについては、昨年度に引き続き進路指導部と連携して企画・実施した。進路指導部では、昨年度より「東京大学金曜特別講座」を毎週オンラインで開講し、毎回100名近くの生徒が参加している。受講した生徒の中には、探究テーマ設定の参考にしたりと、講師に質問したりする生徒も見られた。

また、東京大学の宇野健司氏の協力を得て、「宇野ゼミ」を継続的に実施し、この3年間で全ての学年の生徒が参加する機会に恵まれた。「答えが用意されていない課題」を発見する姿勢や、日常の「学びの作法」についての示唆は、生徒のキャリア形成に寄与している。さらに、12月には、第1学年希望者を対象に東京大学を訪問し、模擬授業の受講や学生との交流を実施した。留学生や社会人とともに国立科学博物館を見学し、文化的背景の異なる人々との対話を経験する機会を設けた。これらの校外での学びは、生徒が「なぜ学ぶのか」「どのように学ぶのか」を考える契機となり、学習意欲や国際理解、主体性の向上に非常にポジティブな変化を与えている。

⑥ 卒業生との連携

第2学年全員が履修する「課題研究」「理数探究」では、一人の教員が約12名の生徒を担当し、探究活動の支援を行っている。教員は、単なる伴走者ではなく、適切に介入する伴走者としてその役割を担っている。先進校視察等を踏まえ、卒業生をTeaching Assistantとして招聘する体制の構築を検討しているが、現時点では募集には至っていない。理由として、本事業の開始当時の高校2年生が、現在大学4回生になっており、大学における自分の研究が忙しことがあげられる。また、校内におけるTeaching Assistantとしての研修体制が整っていない点があげられる。そのような状況の中でも、教育実習生や関心を寄せる卒業生が、中間発表会に聞き手として参加し、在校生と活発な「対話」を行う姿が見られた。今後は、テーマ検討会や中間発表といった、節目の機会に来校してもらうことや、募集の対象を卒業生以外に広げることなどを考え、「縦のつながり」を持続可能な形で発展させていきたい。

⑦ 新教科「グローバル探究」における「グローバル」の再定義について

新教科「グローバル探究」における「グローバル」の概念について、校内で議論を重ね、再定義を行うこととした。運営指導委員会からの助言を踏まえ、まず生徒の認識を把握するための調査を実施した。調査では、「グローバル」の定義について、「地球規模の」「領域を越える」「普遍的な」「その他」の4項目を示した。その結果、第2学年では、「普遍的な」42.0%、「領域を越える」40.2%が多数を占め、「地球規模の」は17.5%であった。第3学年でも同様の傾向がみられ、探究活動を通じて、「領域横断性」や「普遍性」を重視する意識が形成されていることが分かった。一方、第1学年では、目指したいものとして質問した結果、3つの定義にほぼ均等な回答が得られた。これらの結果を踏まえ、新教科「グローバル探究」における「グローバル」は、従来の地理的・国際的広がりには留まらず、「領域や専門分野を越えた応用力」及び「時代や場所を問わない普遍性」を重視する概念として位置づけることが適切であると判断した。今後は、学年進行に応じてこの意識が段階的に形成されるよう、初期段階から多様な視点と深掘りの重要性を指導することが必要であるという認識を持ち、教科目標の実現を図っていきたい。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

新教科「グローバル探究」における「探究基礎」が校内で安定したものになるには、研究指定最終年度まで一定の時間を要した。その要因として3つの分野（情報、探究作法、英語）を、どのように有機的に関連付けるかに加え、「探究基礎」の授業を通して生徒に何を身に付けさせるのかについての整理に時間を要したことが挙げられる。探究作法分野については、先進的な取組を行っている学校の指導事例を参考に授業計画を策定し、研究3年次には、学びが段階的に高次になるよう設計の見直しを行った。情報分野では、教科「情報Ⅰ」の内容のうち、授業内で扱う内容と生徒の自主的な学習に委ねる内容との整理が不可欠であった。この3年間の実践を通じて内容の精選と指導の方向性が整理されたと考えている。また、英語分野については、従来の学校設定科目であった「グローバル英語」の内容を基盤とし、英語科教員及び外国語指導助手（ALT）による綿密な授業計画のもと、生徒の思考力・創造力を伸長させるとともに、発話量の増加を意識した授業展開が実現できている。一方で、研究指定初年度における単元計画の策定時点で、育成したい生徒像についての共通理解をより一層深める体制を構築する必要があると考える。特に、探究活動全体の構造を示す概要図については、視覚的に全体像を共有するためにも、初期段階で策定すべきものであった。この部分が遅れたことが、研究全体の進捗に大きな影響を与えたことは否めない。

今後の課題として、探究活動における学びが、各教科・科目の学びにどのように関与し、相互に作用しているのかがわかりにくい点が挙げられる。探究活動における学年を越えた「縦」のつながりは次第に明確になってきた一方で、教科横断的な学びという「横」のつながりについては、依然として不明瞭な部分が残っている。それに加え、進路実現に向けて培われる学ぶ力と探究する力が、相互に関連し合う姿を生徒自身が実感できているかについても、今後検証が必要である。

特に、探究活動に取り組むことで目標とする力の伸長をより確かなものにするには、次のような点において再整理が必要であると考え。それは、ルーブリックに「日常の学びへの反映」や「得られた知識の探究活動への活用」といった観点を明確に位置付けることが挙げられる。また、探究活動の意義について、生徒と教員がより明確な共通認識を持つことも重要である。本研究の4年間を通じて、特に重きを置いてきた「問い」を大切に探究活動は、教員自身の専門教科における学習や授業に対する考え方の変容を促すことにつながった。以前にも増して「良質な問い」を意識して授業に臨む教員が増えたことで、生徒が「問い」を持ちながら学習を進めることの重要性を教員が再認識する機会ともなっている。今度は、この教員の変容を生徒の学びへと確実に還元するためにも、「探究が必要である」といった観念的なことではなく、探究活動が生涯にわたる学習の基盤であることを生徒に伝え続けることが求められる。

奈良県立畝傍高等学校 全日制課程普通科

探究基礎は情報12単位の内容を含む。

理探究基礎は情報12単位の内容を代替する。そのうち、1単位は夏期休業中等におけるまとも取りである。

理数探究選択者は、総合的な探究の時間3単位を理数探究で代替する。そのうち、1単位は夏期休業中等におけるまとも取りである。

■教育実践基礎は「次世代教員養成塾(前期プログラム)」における学校設定科目である。

※3年後期において、最大4時間間で履修しないことが出来る。

学校等の概要

1 学校名、校長名

学校名：ナ ラケンリツウネビコウトウガッコウ 奈良県立畝傍高等学校

校長名：オオハシ ジュン 大橋 淳

2 所在地、電話番号、FAX番号

所在地：奈良県橿原市八木町3丁目13-2

T E L : 0744-22-5321

F A X : 0744-25-8325

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数、学級数

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	358	9	355	9	373	9			1086	27
定時制	普通科	13	1	11	1	8	1	4	1	36	4
計		371	10	366	10	381	10	4	1	1122	31

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	0	3	0	0	62	0	1	0	0	21
ALT	スクール カウンセラー	事務職員	司書	計						
1	0	10	1	100						

5 研究歴

(1) 文部科学省

平成18～20年度

「学力向上拠点形成事業」研究指定校

平成26～30年度

「スーパーグローバルハイスクール」指定校

平成31～令和3年度

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」
指定校